

心のきずな——仏教思想を手がかりとして

木村清孝 (鶴見大学学長、東京大学名誉教授)
Kiyotaka KIMURA



序言

筆者はこれまで、中国において体系的な思想形成がなされた華嚴教学を中心に、仏教思想の研究を進めてきた。その研究者となることを志してからすでに40年を超えるが、「道いまだ半ば」の思いが深い。

今回、鎌田東二教授とのご縁をきっかけとして、本誌に一文を草することとなった。聞けば、本号は「徳ときずな」をテーマとするという。3月に起きた大震災からの復興が日本全体の喫緊の課題となっている今、まことに時宜を得たものであると思われる。なぜなら、その復興には、社会的経済的な面だけではなく、精神的な面が不可欠であり、「徳ときずな」はそのキーワードの1つと考えられるからである。このテーマの下、本稿も、現に求められている日本の精神的復興に幾分かでも資することになれば、うれしいかぎりである。

現代の状況

初めに、われわれ日本人が共同的に作り出し、その中で生活している現状について見ておきたい。

第2次世界大戦における敗戦から65年、日本は急速な経済復興をなしとげ、一時は「ジャパン・アズ・ナンバーワン」などと持ち上げられる時期もあった。しかし、いわゆるバブルの崩壊後、国際競争が激しさを増し、情報化が進展する流れに否応なく巻き込まれる中で、国家としての日本の力は大きく衰退した。経済的には有数の借金大国であること、政治的には国際社会における指導力・発言力が急速に失われてきたことが、その事実を象徴的に示しているよう。

では、そういう状況の中で、われわれの生活はどのように変わったのだろうか。

思うに、仏教が説く人生の「生・老・病・死」のすがたは、変わりようがない。人は、いつの時代にも、生まれ、年老い、病を得、やがて死を迎える。これが「生きる」すがたであり、その実相を仏教では「苦」と捉える。けれども、その「苦」とは、この世で生きることは、思い通りにはいかず、その中に永続的な真実の安らぎはない、という意味である。心に喜びや楽しみを感じるものが何も存在しえない、いつでも苦痛を感じて生きている、ということではない。しかし、日本の現状を見ると、生活の中のささやかな喜びや楽しみも、いっそう小さく、また薄くなってきているような気がしてならない。

生・老・病・死

まず、「生まれること」(生)をめぐるのは、さまざまな事情から、「生む」ことが制約され、あるいは敬遠される傾向が顕著である。その結果が、いわゆる「少子化」である。だが、その前提となる男女の交わりに対する関心はむしろ強まっているだろうし、交わりそのものも必ずしも忌避されているわけではなからう(ただし、一部には、過度の情報依存などにもとづく性への無関心や性能力の減退が見られるとも聞く)。その結果、墮胎率の増加、「赤ちゃんポスト」の誕生などが見られる。ひどい場合には、赤子のいじめ、放置、殺害といったことさえ起こっているのである。

次に、「年老いること」(老)についていえば、2つの大きな問題があると思われる。その第1は、健康に対する不安の増大である。人は、「いつからか」「どの程度か」という点ではかなりの個人差はあろうが、歳をとるごとに体力・知力の衰えを感じるようになる。そして、自分自身にいらだいたり、周りの人に当たり散らしたりする。「若いころの健康が維持できない」「遠からず、死に至るかもしれない」という不安は、一般的には、老いが進むにつれてさらに大きくなっていくだろう。

もう1つの問題は、生きがいの喪失である。かつては、日本でも、老人は、年老いて生きているというだけで、一定の敬意が払われていた(ちなみに、この「老人」という語は、現在はおそらく、軽蔑の意を含むがゆえのタブーとなっているが、本来

的にはむしろ尊敬の意が込められていた)。それは、生きることがいかに重く、かつ、大変なことかということが一般に諒解されるとともに、老人それぞれがもつ固有の「経験知」が尊重されたからだろう。しかし今は、生きることの意味がほとんど金銭的価値で計られ、個別的な経験において得られる知恵などは洪水のように押し寄せる情報によって撥ね飛ばされる時代である。それゆえ、「国民総生産」を高める経済活動に参加し、稼げている間はよいが、定年その他の事情でそれができなくなり、国その他から給付される年金等で生活するようになると、尊敬もされなくなり、多くの人は生きがいを失いかける。「自分が生きていること自体が社会に迷惑をかけているのではないか」などと考える人さえ出るのである。まことにさびしい時代であるといわざるをえない。

次に、「病むこと」(病)に関しては、医学の発展と医療の進歩によって、多くの病気が克服されてきた。このことには、感謝しなければなるまい。また、新しい治療技術の開発によって、現に制圧の途上にある病気も少なくない。しかし他方、複合的なものも含めて、新たな身心の病気の発生もある。いわゆる「難病」の数も、減少しているわけではなさそうである。要するに、病気との闘いはこれからも続くし、一面では、さらに厳しく、難しくなるということであるが、いかに医学が発展し医療が進歩しても、生命体には必ず成長期と衰退期があり、やがて生命活動が停止する時期、すなわち死期が訪れる。「病むこと」は、一面においてそれを人に確認させ、警鐘を鳴らし、根本的な覚悟を求めるものだといつてよからう。

けれども、われわれがその「病む」ことをすんなりと受け入れ、前を向いて生き続けることは容易ではない。健康に対する自信を失い、後ろ向きにじっと死を待つことにもなり

かねないのが実情だろう。そして、さらに問題なのは、いったん重い病気になる、現代では多くの場合、長く病院に入れられ、時には数カ月ごとに病院から病院へと移されて、大きな精神的支えになってくれるはずの家族や友人から切り離される状態になる、ということである。そういう中で病人が抱く孤独感、察するに余りある。「早く死にたい」という思いをもったとしても不思議ではないだろう。

最後に、「死ぬこと」(死)について見てみよう。今は、特定の病気になって治療の甲斐なく死ぬ場合も、あるいは全身的な老衰によって自然に死ぬ場合も、家で死を迎えることは極めて少ない。多くは、病院のベッドにおいてである。最近になって、終末期を在宅治療にしたり、最後だけは家で迎えさせようとする動きも現れてきたが、統計的にはまだごく稀なケースであろう。

しかし、たとい病院における死であっても、生命を全うした死はよい。より深刻な問題は、それ以外の死に方が増えていることである。すなわち、交通事故などによる事故死、地震・津波などの天災、もしくは火事などの人災による災害死、故意または無差別の殺人死、誰にも看取られずに死後に発見される孤独死、みずから命を絶つ自殺などである。これらは、けだし、現代特有の社会的経済的原因にもとづくところが大きいと考えられる。

以上に述べたように、「生・老・病・死」の人生は、現代の日本において、ますます複雑になり、また総じてさらに深刻化しているように思われる。では、そういう状況の中で、われわれはどのようにして互いの心をつなぎ、平安な社会をつくっていくことができるのだろうか。そのための有益な示唆が仏教の中に見出せるのではないかというのが、筆者の思いである。



図1 断食をする釈尊像(ガンダーラ出土、パキスタン・ラホール博物館蔵、協力:シルクロード・キャラバン)

仏教が考える心

仏教の開祖は、周知のように、釈尊(釈迦、ブッダ)である。すなわち、釈尊は、北インドに王国を築いた釈迦族の王子として生まれ、恵まれた生活を送った後、出家して瞑想を、ついで苦行を実習した(図1)。しかし、満足が得られず、苦行を捨てて再び瞑想に入り、悪魔とその侍女たちの誘惑や挑発を斥け(図2)、悟りを開いてブッダ(覚者)となった。その教えが仏教である。しかし、ブッダの教えとしての仏教は、以後、約2500年にわたって各地に広まり、その過程で何度も新たな編集と解釈が繰り返され、思想的にきわめて豊かな内容をもつものとなった。その総体、すなわち、ブッダの教えとして信じられ、伝えられてきたことの全体が、また仏教と呼ばれる。ここでは、この広い意味における仏教の全体を視野に入れ、その中から、とくに重要と思われる「心」の思想について紹介することにした。

まず、仏教においては現実の心がどのように捉えられ、それをどうすることが勧められているだろうか。この基本的な問題について、もっとも端的に述べているのは、初期仏教



図2 タイ美術で描かれた釈尊の降魔
(Photo from *The Life of The Lord Buddha*, courtesy of Asia Books.)

の時代に成立し、南方仏教国において今日まで読みつがれてきている『法句経』(ダンマパダ)である(図3)。すなわち、本経では、「心」を主題とする一章を設け、

- ・心は動揺し、ざわめき、護りがたく、制御するのがむずかしい。知恵ある人は、これをまっすぐに直す。矢を作る人が、[材を]矯めて矢をまっすぐにするように。
- ・心は捉えがたく、軽々と騒ぎまわり、欲するままに動く。その心をおさめることは、よいことだ。心をおさめれば、安楽がもたらされる。
- ・心は遠くまで行き、独りで動き、形なく、胸の奥の洞窟に潜んでいる。この心をコントロールできる人は、死の束縛から逃れられよう。
- ・心が煩惱にけがされず、思いが乱されず、善悪の[間違っ]はからいを捨て、目覚めている人には、何も恐れることがない。

などと説く。われわれの現実の心のすがたをしっかりと捉えるとともに、それをどうすればよいかを率直、かつ、明確に示しているといえよう。

六識説から八識説へ

こうした心への着目は、一方で心の構造の解明へという方向を生みだす。その素朴な体系的理論が、六識説である。すなわち、心は、眼・耳・鼻・舌・身(皮膚)・意の六根(感覚・意識の器官)が外界の対象である色(いろ・かたちをもつもの)・声・香・味・触(触れられるもの)・法(認識されるもの)と関わることによって、眼識ないし意識という、6つの知覚・認識が形成される、というのである。誰にでも理解できる明解な理論だといえるのではなかろうか。

けれども、これには1つの弱点があった。それは、仏教が他方で「五蘊和合」の人間観(知覚経験の場にお

ける人間は、分析的には、色(身体)と、受(感受)・想(想起)・行(意志)・識(認識)という4つの心のはたらきの和合体と見ることができる、とする)などをよりどころとして、非我論(真実の自我としてのアートマンを立てる必要はない、とする。後には、無我論、つまり、アートマンは存在しない、という思想に変わる)を立てるのに、実際には人は自己中心的にものごとを考え、行動する。しかも、仏教自身もそのことを認めている。ところが、六識説では、この自我的な意識の発生の事実を十分に説明することができないのである。

この問題を深く掘り下げ、本格的な意識論を作り上げたのが、5世紀頃に世に出た無著(アサンガ、図4)・世親(ヴァスバンドゥ)の兄弟ら、大乘仏教瑜伽行派(唯識派)の人々である。かれらは、上述の六識の活動がその奥にある潜在意識に依存していることに気づき、その理論化を試みた。その結果、最終的に定説化したのが八識説である。

八識とは、六識の下に2つの潜在意識の層を置いて意識構造の全体を考えようとするもので、第7識としてマナ識、第8識としてアーラヤ識を加える。このうち、マナ識とは、ほぼ自我意識に相当するもので、これが六識のはたらきを直接的に支え、かつ、規制するという。しかし、本説の特徴的なところは、その奥に

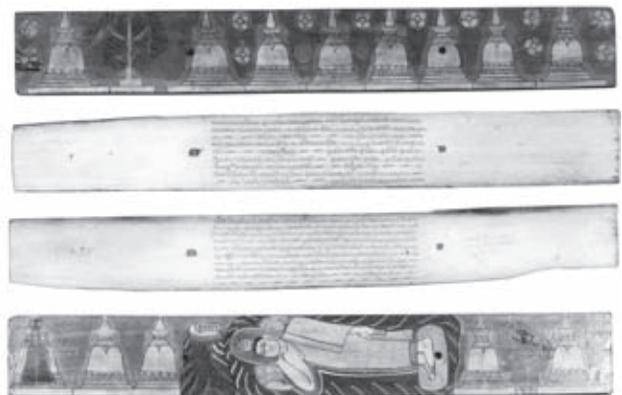


図3 パームリーフに記されたシンハリ文字の『法句経』(コロombo国立アーカイブ蔵、Photo from *Dhammapada: Wisdom of the Buddha* (1980), courtesy of Theosophical University Press.)

さらにアーラヤ識があって、これが意識構造全体の基礎として、上の七識を発生させる根拠となると同時に、それらの活動のありようによって香りづけられ、性質を変えていく、とされることである。そして、望ましい方向に向けてこの変化をもたらす基本的な力として、真実の法に触れること、正しい教えを聞くことが挙げられる。さらに、これを起点として、綿密な長期にわたる行によって、やがて迷いの世界を作り上げている意識の全体が智慧へと転換される、という。今から1500年ほども前に、真摯な瞑想修行の副産物として、このように精密な意識論が生まれてきたことに驚きを禁じ得ない人は少なくなかろう。

仏性説の展開

また、この学派の傍流から、仏と衆生（生きとし生けるもの）との本来的な一体性を強調する人々も現れた。かれらが唱えた思想を包括的に如来蔵思想にょらいざうと呼ぶ。すべての衆生に仏の本性があるとする仏性説も、これに含まれる。この系譜の思想は、インドではさほど有力なものとはならなかったが、東アジア世界には、今日に至るまで、きわめて大きな影響を与えてきた。そして、その中で、おそらく道教などの影響もあって、インドでは除外されていた植物や無機質な自然も仏性を有すると考えられるようになり、日本では「人も自然もそのままで仏である」とさえ見なされるに至ったのである。

もちろん、この仏性の「性」は、原義的には、心それ自体を指すわけではない。しかし、東アジア世界では、しばしば「仏心」と言い換えられることから推察できるように、現実的・実践的な視座に立つときには、心のありようと深く関連付けて捉えられることになり、「人の心の本質は善である」という中国思想とも重なり、ほとんど同一視される状

況も生まれた。例えば、禪宗が広まる礎を築いた中国・唐代の馬祖道一ばそどういつが説く「平常心是道」（日常のあたりまえの心が、そのまま真理の現れである）は、基本的には、そうした仏性説の展開の上に生まれたものといえるだろう。

よりよく生きるために

前節で紹介したように、仏教においては、心の深い考察がなされ、その中で、人間が生きていく上で、心のありようが生根幹となっていることがいくつかの観点から明らかにされている。では、われわれは、それらから何を汲み取り、どのようにして現代を我執と文明病の束縛から解放し、ともによりよく生きる道を創っていけばよいのだろうか。

この問いに向かい合うとき、まず想起されるのは、釈尊の最晩年を描く『涅槃経』ねはんぎょうの中に、釈尊が「自らを鳥とし、自らをよりどころとせよ。法を鳥とし、法をよりどころとせよ」と教えられた、とあることである。また、最初期の経典『スッタニパータ』には、「ひとり生まれ、ひとり死ぬ」という厳しい人生の定めを指摘された教説も見える。突き詰めれば、われわれの誰もが、独りで生きるというあり方を背負って生きる外はない。しかし、それは、決して独りよがりのものであってはならない。真実（法）そのものをよりどころとする、責任ある生でなければならぬ。そして、思うに、それを可能にするために求められるのが、この世にある生命体のすべてはいのちのつながりと支え合いの中でのみ生きられるという「共生」の現実の認識と、これを含めて、存在世界の全体が重層的で限りなく深い関係性において成り立っているという高次の縁起観である。そのことを修得してこそ、自他の平等性と尊厳性、そしてそれぞれがもつかけがえのない美しさが見出されると同時に、互い

著作権保護のため
公開しておりませ
ん

図4 無著菩薩像(興福寺蔵、写真:飛鳥園)

の心がしっかりと結ばれるのではなからうか。

「共成」の理想

けれども、これだけではまだ諦観的で、個人的レベルでの安心は得られても、社会的レベルでの平和は得られない。そのためには、筆者の用語でいえば、「共成」の実践が不可欠だと考えられるのである。

「共成」とは、「共に成す」とことと「共に成る」とことの両義を含み、先に触れた共生・縁起の自覚のもとに手を携えて協働的にことに当たり、次第にその輪を広げながら、助け合って平安な社会の創造へと歩みを進め、その中で、ともにまことの人となる、ということである。この理想を実現することは、容易ではない。それは、筆者自身もよく分かっているつもりである。しかし、この理想を捨てるわけにはいかない。残り少ない人生であるが、さまざまな仕事を通じて、「共成」の理想に少しでも近づけるよう、心が通い合う仲間たちとともに努めていきたいと思う。